

マイペース



吉田裕子

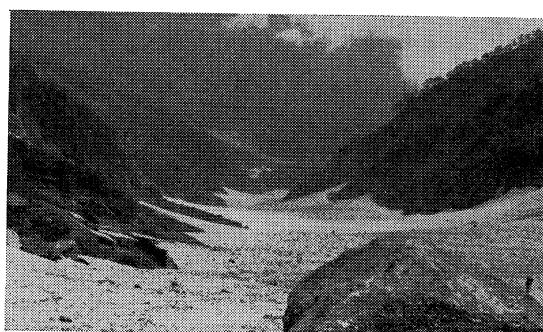
ゆっくりゆっくり、一步一歩。その男は、七十キロ近い荷を背負って傾斜を窮めてゆく。決して自分のペースを崩すことはない。

心臓の鼓動とその足の動きは一体となり、ゆっくりゆっくり、一步一歩、もう何度この登り下りを繰り返してきたことだらうか。

途中のガレ場で彼は、荷を背負つたまま立ち止まる。大きく深呼吸して再びゆっくりゆっくり、頂に近づいてゆく。歩を進めている時も、立ち止まっている時でさえ彼の動きに一切の無駄はない。あらかじめプログラミングされているかのごとく、一連の動きとなり、彼の周囲の空気の流れさえ制御してしまうのでないかと思われるほど見事なものである。毎日毎日、

長く厳しい冬が終わると、山の春となるほど見事なものである。毎日毎日、

夏は、お祭り騒ぎのように艶やかな姿



語りかける自然・白馬

中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中

になる。冬の間中、眼っていた山の暮しも一気に賑わいをみせ、彼も、自分の山に帰ってきた。これから初雪が降るまでの間、彼は毎日毎日、同じペースで山に登る。よほど悪天候ではない限り、荷物を運び上げる。山の上にいる人々に日常の生活物資や麓の話題を届けるために。

登山者が急激に数を増す七月、八月には、日に二度三度往復することもあるが、そのような時でさえ、彼は、かたくなほど自分の呼吸を守る。ゆっくりゆっくり、一步一歩。

昭和四十九年七月三十日。白馬連峰の中でも優しく女性的な佇まいをみせる白馬岳。夏でも消えることのない大

雪渓を越え、鞍部で休憩していた私たちの横を、ランニングシャツから出たたくましい赤銅色の肩に、高く積み上げた荷を担いだ四十前後の強力が通り過ぎた。彼の歩の進め方は、見事だつた。休むときでさえ、荷物を降すことなく、杖の先についた小さな台で背負子を支え、一息いれるとまた歩き出す。時計の振子が左右に揺れるように正確に一步一歩、高山をめざしていく姿。私たちは、しばし呆然となつた。

初めて日本アルプスを代表する山に足を踏み出して、有頂天になり、バテ氣味になっていた私たちに、ペースを守ることの大切さを目の当たりに見せた

がら、その強力は、いつの間にか私たちの視界から消えていた。

それから二時間。やっと頂上にたどりついた私たちに、その強力は、「やあ」というように笑いかけた。

× × × ×

学生生活と別れて、今年で五年目。若さという無鉄砲さでペースを考えずに頂上を目指してきたが、オーバーペースのまま歩いていて、五合目で大休止にならないようになれば。休みなく、一つずつピークを窮めていくためには、自分のペースを確実に守ることこそが大切なだけ、懐かしいアルパムの中に広がる白馬のパノラマを見ながら思う今日このごろである。

(船引町図書館長)